

北海道英語英文学 第31号所載

「Secondary Predication の統語論」

山 田 義 裕

# 「Secondary Predication の統語論」

山 田 義 裕

0. (1)~(2)の下線部の要素は、次の様な特徴をもつと考えられている。

- (1) a. I painted the wall red.  
b. I washed the car clean.  
(2) a. I ate the meat raw.  
b. He drank the tea hot.

まず、これらの要素は文中のある名詞句 ((1)~(2)の場合目的語 NP) と主述関係にある。つまり、叙述用法の形容詞の一種と考えられ、(3)の様に名詞を限定的に修飾している場合とは明確に区別される。

- (3) a. I washed the clean car.  
b. I ate the raw meat.

さらに、これらの述語は、主節動詞と意味関係をもつ名詞句をその主語とするという点で(4)とも異なる。

- (4) I thought him clever.

例えば、(1a)で *red* の意味上の主語 *the wall* は *paint* により示される行為を受ける対象 (patient) になっているが、(4)の *him* は *thought* とこの様な意味関係にはない。(4)で *clever* を省くことができないことから分かる様に、主節動詞 *thought* と意味関係にあるのは目的語 NP ではなく、「目的語 NP +形容詞句」で示される命題である。(1)~(2)は、目的語 NP が後続する形容詞句及び主節動詞の両方と同時に意味関係をもつという点で独特の構文と考えられる。述語がこの様な特徴をもって機能している場合、その述語を Rothstein (1983) にならい、「Secondary Predicates」(以下 SP と略記) とよぶことにし、この述語を含む文の特性を主に統語的観点より考察していく。

1. Chomsky (1981) をはじめとする統率束縛理論では、上で述べた特徴を踏まえた

上で大きく分けて2つの分析法が提案されている。1つは Chomsky (1981), Stowell (1981, 1982) で述べられている分析法で, SP は内部構造として PRO 主語をもつ節構造をとるといふ分析法である。具体的にいうと, (2a) の S 構造は(5)と表示される。この分析では, *the meat* が *raw* の主語であることは, *the meat* に Control されている PRO が構造上この節の主語となっていることで示される。もう一つは Williams (1980, 1983), Rothstein (1983) で提案されているもので, 主述関係は(6)の様に同一指標づけで示される。この指標づけは以下で述べる Predication 規則で行なわれる。

- (5) I [ate the meat [s PRO raw]]. (SC Analysis)  
 (6) I [[ate the meat<sub>i</sub>] raw<sub>i</sub>]. (Predication Analysis)

詳しい議論をする余裕はないが, (5)の様に小節を仮定する分析では, PRO が *ate* に統率されることになり, (7)の束縛理論 (a)~(b) より帰結する「PRO は統率されない」という原則に違反するという点で問題がある。

- (7) Binding Theory  
 a. An anaphor is bound in its governing category.  
 b. A pronominal is free in its governing category.  
 c. An R-expression is free.

一方, Predication 分析では, 以下でみる様に, 1つの argument が2つ以上の  $\theta$  役割をもつことになるため,  $\theta$  基準 (8a) の違反となる。

- (8)  $\theta$ -Criterion 1  
 a. Each argument bears one and only one  $\theta$ -role.  
 b. Each  $\theta$ -role is assigned to one and only one argument.

(Chomsky, 1981, p. 36)

本稿では,  $\theta$  基準は(1)~(2)の場合の二重の  $\theta$  役割付与を許すようゆるめられることを論じ Predication 分析の可能性を考察する。

Predication 分析では, 主述関係は Predication 規則による同一指標づけで示されるため, この規則の条件に違反しない限り, 主語・述語が単一構成素を成している必要はない。Predication 規則及びその条件として(9), (10)が提案されている。

- (9) a. Rule of Predication  
 Coindex NP and X.

b. The C-command Condition on Predication

If NP and X are coindexed, NP must c-command X or a variable bound to X. (Williams, 1980, p. 206)

(10) Rule of Predicate-Linking (for English)

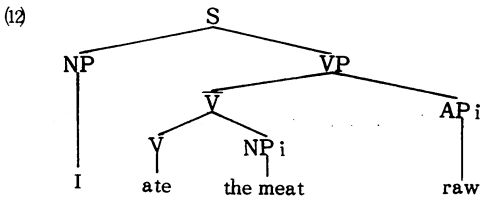
- a. Every non- $\theta$ -marked XP must be linked at S-structure to an argument which it immediately c-commands and which immediately c-commands it.
  - b. Linking is from right to left (i.e. a subject precedes its predicate).
- (Rothstein, 1983, p. 27)

Williams は、さらに、NP は X に c-subjacent でなくてはいけないという条件を (9b) に加えている。

(11) C-subjacent

B is c-subjacent to A iff A is dominated by at most one branching node which does not dominate B.

この条件により、NP と X の間に2つ以上の枝分かれ節点がある場合の規則適用は禁じられる。この種の規則により、例えば、(2a) の *the meat* と *raw* は(12)で示される様に LF の前のレベルで主述関係にあることが示され、LF で *the meat* は *raw* より  $\theta$  役割を受ける。



しかし、*the meat* は *ate* の補部 (Complement) であるため、*ate* によっても  $\theta$  役割が与えられる。この結果、*the meat* は lexical head *ate* と SP *raw* により二重に  $\theta$  役割が与えられることになる。しかし、 $\theta$  基準により、1つの argument が2つ以上の  $\theta$  役割をもつことは禁じられており、Predication 分析はこの点で  $\theta$  基準に関し問題となる。

ここで、二重の  $\theta$  役割付与についてもう少し詳しく考えていく。二重の  $\theta$  役割付与の可能性は2タイプに分けて考えるべきである。1つは、 $\theta$  位置から  $\theta$ 位置への移動によるものである。もう1つは、lexical head, あるいは Primary Predicate と

SP による二重の  $\theta$  付与である。Chomsky (1981) が  $\theta$  基準で排除しようとしていたのは前者、つまり Move  $\alpha$  によるものであり、後者のタイプの二重の  $\theta$  役割付与を排除する理由はどこにもない。Move  $\alpha$  による二重の  $\theta$  役割付与の例は(13)である。

(13) \**John<sub>i</sub> saw t<sub>i</sub>*

(13)の主語位置、目的語位置はともに  $\theta$  位置であり、*John* はこの両方の位置より二重に  $\theta$  役割を付与され非文となる。(13)のような Move  $\alpha$  によるタイプの  $\theta$  役割付与のみを禁じ、SP による  $\theta$  役割付与を許すように  $\theta$  基準をゆるめられれば、上でみた Predication 分析の問題は解決する。

この試みの1つとして、Rothstein (1983) は Schein (1982) に従い、 $\theta$  基準を(14)に弱め、さらに Move  $\alpha$  による二重の  $\theta$  役割付与を排除するため(15)を仮定している。

(14)  $\theta$ -Criterion 2

- a. Each argument bears a  $\theta$ -role.
- b. Each  $\theta$ -role is assigned to one and only one argument.

(Rothstein, 1983, p. 171)

(15) Any two  $\theta$ -roles  $\theta_1$  and  $\theta_2$  cannot be assigned to the same NP if and only if the  $\alpha$  that selects  $\theta_1$  also selects  $\theta_2$ .

(8a) を (14a) に弱めることで、二重の  $\theta$  役割付与が可能となる。(14a) に弱めると、Move  $\alpha$  による二重の  $\theta$  役割付与も許すことになるが、これは(15)で排除される。例えば、(13)では *John* に与えられる2つの  $\theta$  役割は、ともに単一の lexical head *saw* に select されているため(15)に抵触する。しかし、(15)には反例がある。(16)の *John* は別々の Predicates により  $\theta$  役割を与えられているにも拘らず非文となっている。

(16)

\**John<sub>i</sub>*  $\xrightarrow{\theta_1}$  *believed* [*t<sub>i</sub>*  $\xrightarrow{\theta_2}$  [*to be honest*]].

この点で、Rothstein, Schein の分析は不十分と考えられる。

Chomsky (1981) は、 $\theta$  役割付与、 $\theta$  基準を機能連鎖 (Function Chain) を用いて述べ直している<sup>(1)</sup>。この考えを仮定することで、上で述べた問題が解決できそうである。実際、Chomsky (1984) でもこの可能性が指摘されている。 $\theta$  基準を Chain を用いて述べ直したのは(17)である。

(17)  $\theta$ -Criterion 3

- a) Each argument  $\alpha$  appears in a chain containing a unique visible  $\theta$ -position P, and b) each  $\theta$ -position P is visible in a chain containing a unique argument  $\alpha$ . (Chomsky, 1984, p. 137)

(17a) は(8a) とは異なり、1つの argument に2つ以上の  $\theta$  役割が付与されることを禁じているわけではない。1つの Chain が2つ以上の  $\theta$  位置をもつことを禁じているだけである。 $\theta$  位置から  $\theta$  位置への移動を含む Chain は、複数の  $\theta$  位置をもち、その位置により複数の  $\theta$  役割を付与されるため (17a) に違反する。一方、lexical head と SP による二重の  $\theta$  役割付与の場合は、Chain が2つ以上の  $\theta$  位置をもつわけではないため (17a) には抵触しない。それ故、 $\theta$  基準を Chain を用いて述べ直すと、排除される二重の  $\theta$  役割付与は Move  $\alpha$  によるタイプに限られるため、Predication 分析は  $\theta$  基準の違反とはならないことになる。

次の節では、Predication 規則による SP を含む文の分析を、具体例を示しながら論じていく。

2. SP は、意味上(18~20)の3つのタイプに分類できる。

- |      |  |                |
|------|--|----------------|
| (18) | a. I shot him <i>dead</i> .                    |                |
|      | b. I hammered the metal <i>flat</i> .          | RESULTATIVE    |
| (19) | a. He sells them <i>new</i> .                  |                |
|      | b. He drank his coffee <i>hot</i> .            | DEPICTIVE      |
| (20) | a. John didn't arrive, <i>drunk as usual</i> . |                |
|      | b. <i>Unhappy</i> , she returned to work.      | CIRCUMSTANTIAL |

ここで考えなくてはいけないのは、(18~20)の SP が全て同じ統語上の資格をもつのかどうか、もし違うとすればどの点で異なり、その違いはどこから帰結するのかという問題である。

2.1. まず、resultative と depictive を比較していく、resultative は、動詞の示す行為の及ぶ対象の結果としての属性を記述する。一方、depictive は、動詞が示す行為が起こった時点で、その行為に付随してみられる、ある対象の状態、特性を記述する。

resultative は、depictive と比較し、主節動詞との結びつきが強い。resultative と動詞の結びつきの強さを示す例として、まず、(20)がある。

- (20) a. He bleached white the shirt.

b. He pounded soft the clay. (Bolinger, 1971)

resultative と動詞の因果関係が極めて強い場合には、この2つが結びつき、複合動詞の様に機能することができる<sup>(2)</sup>。depictive は、(2)の形は不可能である。また、resultative として用いられる述語のタイプ、あるいは resultative をとる動詞のタイプに関し一応の意味的傾向はあるが、動詞がどの resultative を許すかは、それぞれの動詞の個有の語彙特性で決まる<sup>(3)</sup>。

- (2) a. He hammered it flat / smooth / shiny / \*beautiful / \*safe / \*tubular.  
 b. He wiped it clean / dry / smooth / \*damp / \*dirty / \*stained.  
 c. She shot him dead / \*lame / \*paranoid / \*wounded.

(Green, 1972)

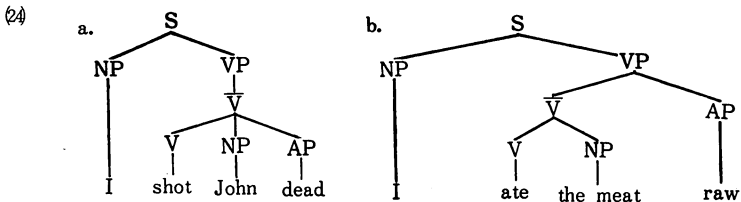
動詞が resultative としてどの述語をとるかは、それぞれの動詞の特性で決まるとすると、これらの共起制限は lexicon で述べられるのが自然である。そうすると、resultative は動詞を下位範疇化する位置にあると分析できる。depictive も、(2)のとおり、「一時性の制約」により制限を受けるが、この制約は depictive 一般にあてはまるものであり、個々の動詞の語彙特性が関係しているのではない。

- (2) a. The ballerina ate her lunch dizzy / drunk / \*tall / \*Russian.  
 b. We eat carrots raw / \*orange.

(Randall, 1982)

(Rothstein, 1983)

後の議論で示す様に、depictive は動詞の付加語として機能していると考えられる。resultative, depictive を含む文の構造を(2)と仮定する。



この構造を仮定すると、resultative, depictive 両方を含む文では、resultative は depictive に先行するという事実が自動的に説明される。

- (2) a. I painted the wall red unsanded.  
 b. I cooked the meat dry unsalted. RESULTATIVE+DEPICTIVE

c. \*I painted the wall unsanded red.

b. \*I cooked the meat unsalted dry. DEPICTIVE+RESULTATIVE  
(Emonds, 1976)

Circumstantial の特性を論ずる前に, predication 規則 (9), (10) が resultative, depictive に適用される際, どのような経験的違いがみられるかをみてる。Williams (1980) は, (9)に加え, 「VP 内部の predicate は, 動詞の theme と結びつく」という条件を仮定している。しかし, この条件は, depictive にしかあてはまらず, 後で resultative を含め意味制約として述べ直すため, ここでは考慮からはずすことにする。(9)は, predicate-linking の条件として, 名詞句が SP を C 統御することを要求する。一方, (10)では, それに加え, SP の方も名詞句を C 統御し, 互いに C 統御の関係になっている必要がある。C 統御は, Aoun-Sportiche (1982) の定義を仮定する。

☒ C-command

$\alpha$  c-commands  $\beta$  if and only if every maximal projection dominating  $\alpha$  also dominates  $\beta$ .

(9), (10)は, SP が動詞の目的語 NP と結びつく場合は全く同じ予測をする。目的語 NP の C 統御領域は VP のため, どちらの制約も動詞の目的語 NP と結びつく SP は VP 内部にあることを要求する。また, 前置詞の目的語との predicate-linking は, どちらの制約でも正しく排除される。(27b)の *it* は *dead* を C 統御しておらず, (9), (10)どちらの制約とも predicate-linking が不可能と予測する。

☒ a. I presented  $it_i$  to John *dead* $_i$ .

b. \*I presented John [PP with  $it_i$ ] *dead* $_i$ .

c. John loaded the hay $_i$  into the wagon *green* $_i$ .

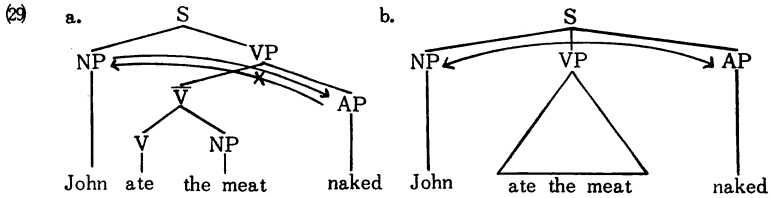
d. \*John loaded the hay into the wagon $_i$  *full* $_i$ . (Williams, 1980)

(9), (10)の制約が決定的に異なるのは, ☒の様に SP が主節動詞の主語 NP と結びつく場合である。

☒ John $_i$  ate the meat *naked* $_i$ .

Rothstein の規則(10)は, 主語 NP と結びつく SP は主語 NP と互いに C 統御の関係にある位置になければならないと予測する。つまり, (29b) で示される位置になくてはいけない。





Rothstein の分析では、SP が主語 NP と結びつく場合と目的語 NP と結びつく場合ではその統語上の位置が (24b), (29b) で示されるとおり構造的に区別されることになる。しかし、depictive と分類される SP は、たとえ(29)の様に主語 NP と結びつく場合でも VP 内部の要素であることを示す証拠がある。

Jackandoff (1977) によると、V'' 補部 (ここでいう VP の付加要素) は、文の main assertion の一部であり、焦点となることができ、文否定や疑問に影響を受ける。一方、V''' 補部 (S の付加要素) は、文の assertion に対し補助的な assertion を付け加えるだけで、焦点とはならず、文否定や疑問の影響を受けない。depictive は、たとえ主語 NP と結びつく場合でも、様態の副詞と同様 VP の付加語としての特性をもつことが Nichols (1978), 広田 (1982) で指摘されている。このことは、(30)~(32)が示すとおりである。

(30) He drank the tea cold.

=The tea was cold (had gotten cold) when he drank it.

≠He drank the tea when it was cold. (Nichols, 1978b)

(31) Did he come home drunk?

a. No, sober.

b. ?\*No, he didn't come home.

(32) a. John didn't come home drunk, but he came home sober.

b. ?\*John didn't come home drunk, but he went to Chicago.

c. John didn't eat the meat raw, but he ate it roasted.

d. ?\*John didn't eat the meat raw, but he drank wine.

(Hirota, 1982)

主語と結びつく depictive は VP ではなく S に付加されているという Rothstein の主張に反し、実際には depictive は全て VP の付加要素としての特性を示している。さらに、depictive が VP 内の要素であることは、(32)の様に VP 構成素の一部としてふるまうことから分かる。

(33) a. VP-preposing

John said he would eat the meat nude / singing and eat the

meat nude / singing he did.

b. *Though* movement

Eat the meat nude / singing though John did, they still thought  
he was a free loader. (Andrews III, 1982)

以上の事実より, depictive は常に VP の付加要素であり, 主語 NP と結びつく場合も (29a) の構造をもつと考えられる。そうすると, Rothstein の相互的 C 統御の制約は, predication 規則の制約としては強すぎることになる。つまり, (29a) の *naked* は *John* を C 統御せず, predication 規則の適用は阻止されてしまう。predication 規則の制約は, Williams の C 統御・C 下接を用いた制約に弱められるべきであろう。この制約では, (29a) の *John* は *naked* を C 統御し, かつ *naked* と C 下接の関係にあるため規則適用が可能である。動詞や前置詞の目的語位置にある NP の predicate-linking の可能性に関しても, 上でみた様に, C 統御・C 下接の制約で十分である。それ故, predication 規則を(34)と述べ直す。

(34) Predication Rule

Non- $\theta$ -marked XP must be linked at S-structure to an argument (or its trace) which c-commands it and is c-subjacent to it.

しかし, (34)にも問題がある。Predication 規則の制約を(34)に弱めることで, Rothstein の制約で正しく排除されていた(35)が説明できなくなる。

- (35) a. \*John painted the carts tired. (i. e., until he was tired)  
(Rothstein, 1983)  
b. \*I ate the food sick. (This cannot mean: I ate until I was sick)  
(Simpson, 1983b)

resultative は常に VP 内の要素であるため, 主語 NP とは相互的 C 統御の関係になく, Rothstein の制約は(35)が容認不可能と予測する。一方, (34)は, (35)の主語 NP と SP を誤って結びつけてしまう。しかし, (35)は別の理由で容認不可能となっていると考えられる。resultative は, 動詞の示す行為が及ぶ対象の結果としての属性を示すものである。それ故, resultative の意味上の主語は行為を受ける対象, つまり patient でなくてはいけない。resultative は, その意味上の主語として patient をとるという意味的制約で(35)が容認不可能であることが説明できる<sup>(4)</sup>。もう1つ, (34)の制約で説明のつかない事実がある。

- (36) \*I gave him<sub>i</sub> a dog dead<sub>i</sub>.

⑧は Rothstein の制約⑩でも説明がつかない。Rothstein は、⑧を説明するのに、「Goal の意味役割をもつ argument との predicate-linking はできない。」という意味制約で⑧を説明している。⑧, ⑨の事実は、より一般的に説明可能かもしれないが、ここでは今述べた2つの意味制約が作用していると仮定しておく。

2.2. Circumstantial は、主節内のある argument の属性を述べると同時に、主節の示す命題を修飾し、主節命題の「時」、「理由」、「条件」、等を示す。

- ⑦ a. You shouldn't have taught John the alphabet *so young*. TIME  
 b. John didn't arrive, *drunk as usual*. REASON  
 c. People are so strange. I couldn't sell the books *cheap*; they wouldn't buy them. But when I jacked up the price they bought them all up. CONDITION (Simpson 1983a)

Rothstein は、circumstantial は depictive とは統語的に区別されないと述べている。しかし、この主張とは反対に、これらが明らかに統語上異なる資格をもつことを示す証拠がある。

resultative, depictive が VP 内の要素であることは前節で示したが、これらと対照的に、circumstantial は文が示す命題に対し付加的な assertion をおこなうという点で文副詞と類似している。実際 circumstantial は resultative, depictive と比較して主節動詞との結びつきが弱く、文副詞と同様 <sup>(-)</sup>S に付加されている可能性を支持する証拠がいくつかある。文頭への前置は、VP 内の要素より <sup>(-)</sup>S の付加要素の方が容易であることが知られている<sup>(5)</sup>。特別の音調で読まれない限り、文頭への前置は circumstantial に限られる<sup>(6)</sup>。

- ⑧ a. \*Dead<sub>i</sub>, Jesse shot him<sub>i</sub>. RESULTATIVE  
 b. \*Alive<sub>i</sub>, they burned her<sub>i</sub>.  
    \*Happy, he walked along.  
    \*Ripe, the apples were picked. DEPICTIVE  
 c. Hungry, I simply cannot work.  
    Cheap, the book might sell. CIRCUMSTANTIAL  
 (Green, 1973; Nichols, 1978a; Simpson, 1983a; Quirk *et al.*, 1972)

第二に、⑨が示す様に、circumstantial は否定の作用域に入れない。

- ⑨ a. John didn't arrive drunk. (He arrived sober.) DEPICTIVE  
 b. John didn't arrive, drunk as usual. (He didn't arrive at all')

第三に、文の焦点として機能できない。

(40) a. Why did Jack go to Moscow?

{ \*Fond of Russians, he went to Moscow.  
 { \*He went to Moscow fond of Russians. (Simpson, 1983a)

b. I can't work hungry.

≠I'm hungry when I can't work.

=I can't work when I'm hungry. (Nichols, 1978b)

これも、(30)~(32)の depictive の例とは対照的である。さらに、depictive 等とは異なり、circumstantial の前には強い音調の切れ目があり、(39b) の様に主節とコンマで分けられるのが普通である。これらの事實は、circumstantial はVP の外、つまり<sup>(-)</sup>S に付加されていることを示している。<sup>(-)</sup>S の付加要素と考えることで、resultative, depictive との線の順序も自動的に説明される。circumstantial は、resultative, depictive の後に現れなくてははいけない。

(41) a. You can rub it smooth wet.

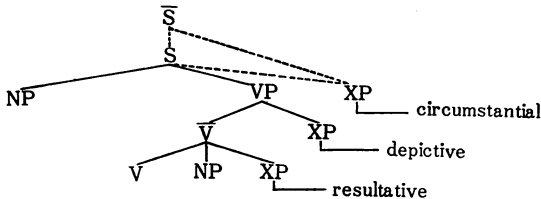
RESULTATIVE+CIRCUMSTANTIAL (Halliday, 1967)

b. He would never have eaten the meat raw, sober.

DEPictive+CIRCUMSTANTIAL (Simpson, 1983a)

これまでの議論より、resultative, depictive, circumstantial は(42)の様に統語上階層を成していると結論できる<sup>(7)</sup>。

(42)



(42)の階層構造は、SP と動詞の意味的結びつきの強さが統語上反映されたものと考えられる。

次に、circumstantial が(42)で示される位置にあると仮定した場合、Predication 規則(4)が circumstantial の Predicate-linking の可能性を正しく予測できるか否

かを見ていく。(44)は, predicate がその argument の C 統御領域にあることを要求する。circumstantial を C 統御しているのは主語 NP のみであり, それ故, circumstantial の意味上の主語となれるのは主節の主語 NP に限られるはずである。しかし, 事実はそうでない。(43a), (44)では, circumstantial が目的語 NP と結びついていながらも拘らず容認可能である。

- (43) a. The gynaecologist met Lucy<sub>i</sub>, [pregnant for the ninth time]<sub>i</sub>.  
 b. Lucy<sub>i</sub> met the gynaecologist, [pregnant for the ninth time]<sub>i</sub>.  
 (44) They showed Lucy<sub>i</sub> into her room, [exhausted and in need of a good night's sleep]<sub>i</sub>. (Simpson, 1983a)

また, resultative, depictive と異なり前置詞句内の NP をも意味上の主語とすることができる。

- (45) John was passed [by Mary<sub>i</sub>] in the hall yesterday [drunk as usual]<sub>i</sub>. (Bresnan, 1982)

さらに, SP は Goal の意味役割をもつ NP と結びつかないという意味制約があることを示したが, circumstantial はこの制約にも従わない。

- (46) a. \*John gave Bill<sub>i</sub> the dog *dead*<sub>i</sub>. DEPICTIVE  
 b. You shouldn't have given John<sub>i</sub> that book *so young*<sub>i</sub>.  
 CIRCUMSTANTIAL (Halliday, 1967)

これらの事実は, circumstantial を SP の一例と分類するという仮定は考慮しなおす余地があることを示している。

(47)~(50)の例が, circumstantial の分析を再考察するきっかけを与えてくれる。

- (47) a. Probably unhappy with the television, they left the room. (Fabb, 1984)  
 b. Predictably defensive, evangelical politicians charge that such criticisms are themselves political sour grapes from liberal opponents. (Stump, 1985)  
 (48) Her face scarlet, Mary left the room. (Bresnan, 1982)  
 (49) My son, persuaded to enter my business, gave up his plan.  
 (50) a. Setting sail for the island in the fall of 1740, he reached his destination in the spring of 1741.

- b. Having been on the train yesterday, John knows exactly why it derailed. (Stump, 1985)

まず、(47)で circumstantial が文副詞、つまり統語上 S に付加される副詞に修飾されている。このことは、circumstantial が節構造をもつ可能性を示している。また、(48)の様に、circumstantial は絶対主格の構文で用いられると明示的主語をとる。さらに、主語が明示されていない場合でも、S 構造で空範疇主語が存在しなくてはいけないことが(49)から分かる。(49)の様に、circumstantial が受動態の形となっている場合、S 構造は(51)でなくてはならない。

- (51) [PRO<sub>i</sub> persuaded t<sub>i</sub> to enter my business], ...

束縛条件により NP trace は統率範疇内で束縛されねばいけないため先行詞として PRO 主語が必要となる。これらの事実より、circumstantial は、PRO 主語をもつ節構造と考えられる。そうすると、circumstantial は節構造内部でその主述関係が示されるため、Secondary Predicates ではなく、Rothstein の意味での Primary Predicates の例となる。

Circumstantial は、主節と独立した時を示すことができるという点でも resultative 等とは異なる。resultative, depictive の場合は、主語命題により示される時と SP の時は(52)が示す様に同時でなくてはならない。

- (52) \*(Yesterday) I painted the house white tomorrow. (Ueyama, 1982)

これは、SP が節構造をもたず、INFL を欠いているため、その時は常に主節の INFL の影響下にあることに起因すると思われる。一方、circumstantial には、(50)が示す様に、このような制限はない。circumstantial の示す時制が、どのレベルで、どの様に表示されるかに関しては問題は残るが、ここでは circumstantial は INFL を含む節構造(53)を内部構造としてもつと考える。

- (53) [<sub>S</sub>[<sub>S</sub> PRO INFL XP]]  
[-tense]

3. 本稿では、Secondary Predicates とよばれる 3 タイプの述語に対し、主に統語的観点より分析を試みた。1 節では、Predication 分析を仮定した場合の  $\theta$  理論における帰結を論じた。つまり、 $\theta$  基準は二重の  $\theta$  役割付与を許す様ゆめられるべきであり、これは  $\theta$  基準を Chain を用いて述べることで可能となることを示した。2 節では、3 タイプの SP のそれぞれの特性を論じ、SP は主節動詞との結びつきの強さ

により(4)に示す階層構造をなすことを例証した。また、主語と結びつけられている depictive が VP 内要素であることを示す証拠が存在するため、Predication 規則の制約は相互的 C 統御から C 統御・C 下接に弱める必要があると論じた。さらに、circumstantial の特異性をいくつか論じ、circumstantial は、resultive, depictive と異なり、PRO 主語をもつ節構造を内部構造としてもち、Secondary Predication の事例ではないと結論づけた。

#### Notes

- (1) Cf. Chomsky (1981), pp. 334-335.
- (2) *shoot-dead* の様な「動詞+resultative」が基底で complex verb である可能性もある。この分析を仮定すると、動詞と resultative が目的語 NP に複合的に  $\theta$  役割を与えると考えられるため、resultive は SP の例とはならないことになる。
- (3) Simpson (1983) では、resultative をとる動詞は verbs of CONTACT, verbs denoting some CHANGE OF STATE に限られると述べられている。
- (4) \*He<sub>i</sub> was shot at *ti* dead. \*He's painting on the canvas red. は、(4)で説明できるが、意味的には目的語 NP が必ずしも動詞の示す行為により直接影響を受けるわけではないため容認不可能となっているとも考えられる。
- (5) Cf. Williams (1974).
- (6) (38b) は、Yiddish-movement の読みでは、容認可能とする話者もいる。cf. Nichols (1978a), Green (1973).
- (7) Williams (1975), 太田 (1980) の副詞節、副詞句の階層が正しいとすると、circumstantial は  $\bar{S}$  の付加要素と考えた方がよいかもしれない。

#### References

- Andrews III, A. (1982) "A Note on the Constituent Structure of Adverbials and Auxiliaries," *Linguistic Inquiry* 13.
- Aoun, J. and D. Sportiche (1982) "On the Formal Theory of Government," *The Linguistic Review* 2.
- Bolinger, D. (1971) *The Phrasal Verb in English*. Harvard Univ. Press.
- Bresnan, J. (1982) "Control and Complementation," *Linguistic Inquiry* 13.
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*. Foris.
- \_\_\_\_\_. (1984) "Knowledge of Language: Its Nature, Origins and Use," ms., MIT.
- Emonds, J. (1976) *A Transformational Approach to English Syntax*. Academic Press,
- Fabb, N. (1984) "Syntactic Affixation," PhD dissertation, MIT.

- Green, G. (1972) "Some Observations on the Syntax and Semantics of Instrumental Verbs," *CLS* 8.
- . (1973) "A Syntactic Syncretism in English and French," in B. Kachru *et al.* eds., *Issues in Linguistics*. Univ. of Illinois Press.
- Halliday, M. A. K. (1967) "Notes on Transitivity and Theme in English, Part I," *Journal of Linguistics* 3.
- Hirota, N. (1982) "Quasi-Predicatives as V"-Complements," 『筑波大学文芸言語研究・言語篇7』。
- Iwasawa, K. (1985) "Three Levels of Complement APs and the Notion of Time," *English Linguistics Today*. Kaitakusha.
- Nichols, J. (1978 a) "Double Dependency?" *CLS* 14.
- . (1978 b) "Secondary Predicates," *BLS* 4.
- 太田 朗 (1980) 『否定の意味』太修館。
- Quick, R. *et al.* (1972) *A Grammar of Contemporary English*. Longman.
- Randall, J. (1982) "A Lexical Approach to Causatives," *UMOP* 7,
- Rothstein, S. (1983) "The Syntactic Forms of Predication," PhD dissertation, MIT.
- Schein, B. (1982) "Small Clauses and Predication," ms., MIT.
- Simpson, J. (1983a) "Aspects of Warlpiri Morphology and Syntax," PhD dissertation, MIT.
- . (1983b) "Resultatives," in L. Levin *et al.* eds., *Papers in Lexical-Functional Grammar*. IULC.
- Stowell, T. (1981) "Origins of Phrase Structure," PhD dissertation, MIT.
- . (1982) "Subjects Across Categories," *The Linguistic Review* 2.
- Stump, G. T. (1985) *Semantic Variability of Absolute Constructions*. Reidel.
- 上山恭男 (1982) 「いわゆる第5文型の意味解釈について」『函館英文学21』。
- Williams, E. (1974) "Rule Ordering in Syntax," PhD dissertation, MIT.
- . (1975) "Small Clauses in English," in J. Kimball ed., *Syntax and Semantics* 4.
- . (1980) "Predication," *Linguistic Inquiry* 11.
- . (1983) "Against Small Clauses," *Linguistic Inquiry* 14.

(北海道大学大学院博士課程)